

一八五七年恐慌(五)

三 宅 義 夫

二

前記のように一八五五年六月末からイングランド銀行の金属準備は減少に転じ、三 $\frac{1}{2}$ パーセントにまで引下げられていたバンク・レートもこれを境に反騰に転じ、十月には六、七パーセントという一八四七年のかたはじめての高さに引上げられ、この高いレートは一八五六年の五月まで長期にわたって持続けられた。マルクスは一八五五年五月、つまりこの逼迫のはじまる前に前掲の「金融事情」なる一文を書いたが、そのあと、一八五五年秋の逼迫のさいには——この逼迫は「金融事情」では予想しなかった、むしろその逆の動きであるから、マルクスがひきつづいてこの逼迫について説明しようとすればどのように説明したかを見ることは、それだけ興味あることなのであるが——なにも書いていない(エンゲルスの書いたものもない)。したがって、つぎは、一八五七年恐慌にいたる前年、一八五六年秋の逼迫になるのであるが、その前に、前掲のところのあとそこにいたる間の記述を見ておくこととしよう。

一八五六年四月十四日付エンゲルスからマルクスへの手紙。——「ドイツにおける Schwindel [過度投機] は、実際、未曾有の盛況を呈している。メヴィッセン (Mevissen) はライン州の王者であり、モルニ (Morny) に一緒にアン

デバンダンス(Indépendance)を買取り、ルクセンブルク(一)にインテルナチオナーレ(ばんざい)・バンクを設置している。プロイセン通信の泣言論文(Heutartikel)はほくも読んだ「これは、これに先立つ四月十日付マルクスからエンゲルス宛の手紙のなかで「ライン州とベルリンでは、フランスから侵入してきた『投機の投機(Spekulation auf die Spekulation)』——観念ではなく株式における——がラインの彼岸におけるようにひどくはびこっているらしい。この社会的害と瞞着とにたいする嘆きの調子が政府の『プロイセン通信』のなかに現われている。そこでは近い将来における『不可避免的』な一般的貨幣恐慌が真剣かつ力をこめて暗示されている」と記しているのを受けているものであらう」。しかしマントイフェル(Mantouffiel)とフォン・デア・ハイド(von der Heydt)とがSchwindelを抑圧しないように、注意が払われている。かくて、ハノーヴェル、ライプチヒその他いたるところでクレディ・モビリエが設立され、これらの銀行でもやれないようなことは内々でSchwindelが行われている。いまやSchwindelの最後の段階がはじまっているのであって、ロシアは資本と投機を輸入しており、かくてこの遠隔さと数百マイルの鉄道とで、Schwindelは近いうちに首の骨を折るほどまでに発展することであらう。北京その他への支線をもつイルクーツク大幹線についてわれわれが聞くときは、われわれの旅装をととのえるべきだ「事が起こってわれわれの出でゆくべきときだ、という意味であらう」。今度は崩壊は前代未聞のことになるだらう。というのは、すべての要素が存在している、——強度、普遍的な拡がり、およびすべての有産的、支配的、社会分子の捲込み。ここでもっとも面白いのは、この地で行われているような『健全な』取引にあってはそんなことはぜんぜん起りえないという確信に生きているイギリス人諸君だ。直接の生産における少額の資本投資でも一年以内にすべての市場の供給過剰(Überführung)をひき起こしうるということが一般に知られているところでは、そしてとくに交通資本にたいするかかる巨大な需要が存するかぎり、工業生産

においては強いSchwindelが行われぬ、——ということとはまったく明らかだ。しかし工業生産もまた交通におけるSchwindelによっていちじるしくその限度以上に高められる。ただ、たとえば一八三三—一八三六年や一八四二—一八四五年にくらべれば、より緩慢なだけで「強いSchwindel」が行われぬことは「まったく明らか」であるが、しかしだいたいにはイギリスの生産も「限度以上」に高められることになる、といっているのであらう。なお、マルクスは、のちに見るように、イギリスのこの「健全」さについて、イギリスの「健全」な取引が大陸のSchwindelにもとづいていること——つまり、イギリスとしては需要があるので生産をしても、この需要がSchwindelによってつくり出されたものであるかぎり、その生産も「健全」なものとはいえないわけである——、および大陸のSchwindelのなかにイギリス資本が投下されていることを指摘している（一八五六年九月二十六日付マルクスからエンゲルスへの手紙）。今年（一八五六年）は棉花価格は、三五〇万バーレンという未聞の大収穫にもかかわらず、急速に騰貴している。そしてこの収穫も、たとえば一八五〇年に二五〇万バーレンが見えたであろう以上に大きくは見えないのだ。そのうえ、大陸は今年は、イギリスとの比較において、五年前のほとんど三倍を占めている。……〔ここに九月一日から四月一日まで七カ月間のアメリカの棉花輸出量の数字が、一八五三—一八五六年の各年について、イギリス、フランス、その他ヨーロッパ諸港向の三とおりに分けて掲げられている〕……すなわち、大陸は一八五三年にはイギリスへの輸出の $\frac{45}{110} = \frac{1}{3}$ であったが、一八五六年には $\frac{70}{113} = \frac{5}{8}$ を占めた。そのうえに、大陸がイギリスから買ったものが加わる。見られるように、大陸の工業はイギリスの工業とまったく不釣り合いに高まった。そしてやや減退に向いつつあるイギリス人諸君は、かれらの木綿工業において行きすぎ（overtrading）にいたらない原因を十分に持っているのだ。だが一八五三年と一八五六年とを比較するのもっとも適当だ、というのはこの両年に収穫が非常に大きかった——三三〇万および三五〇万バーレン——からだ。フランスへの輸出が大きいのはたんに外見

にすぎない、というのは、一部はアーブルからスイス、バーデン、フランクフルト、およびアントワープへ行くのだから、だが大陸工業のこの巨大な昂揚のうちに、イギリスの革命のもっとも活力ある萌芽が横たわっているのだ」(傍点—三宅、以下断りなきがぎり同じ)。

一八五五年九月にセヴァストポリスが陥落し、一八五六年三月にはパリ条約が結ばれた。一八五六年にはイギリスの輸出は一八五三年——マルクスが一八五五年一月に、満期到来の恐慌を期待しつつイギリスのこれまでに最高の繁栄の年と記していたところの——を大きくこえて増加した。バンク・レートは一八五六年五月二十三日には六パーセント一本とされ、ついで同二十九日には五パーセントに、七月二十六日には四 $\frac{1}{2}$ パーセントに引下げられ、以後十月一日にふたたび五パーセントに引上げられるまでの間の一とき金融の引緩みが生じた。「一八五六年に入ってから数カ月の間、金融市場は強い『窮屈』状態をつづけ、イングランド銀行の地金はほとんど変化がなかった。これが最低であったのは四月二十六日で、このときには九、〇八一、六七五ポンドであった。そのあとそれは漸次増大し、また割引率は夏には約四 $\frac{1}{4}$ ないし四 $\frac{1}{2}$ パーセントに下った。しかし十月には、地金はふたたびきわめてかなり減少し、割引率は七、八パーセントに上昇し、逼迫が一八五五年とほぼ同様なきびしさで生じ、この年の終りまでほとんど変わらずに続いた (Macleod; op. cit. vol. II, p. 150)。つまり、一八五七年にいたるまでに、金融状況は、一八五六年にもいま一度一八五五年のような逼迫—緩慢—逼迫の過程がくり返されたのであり——一八五六年の秋の逼迫は五五年秋のさいよりもより強かった——、そしてこの間イギリスの輸出は、したがって生産は一八五三年のピークをこえて増加し、そしてこれが三度目にくり返された一八五七年についても恐慌にまで爆発することとなったのである。

ところで、一八五〇年代は、イギリスにおいても株式会社組織の興隆期であったが、大陸においても、ペレール

(Pereire) 兄弟のクレディ・モビリエ (Credit Mobilier) が一八五二年に設立されたのをはじめとして、いわゆる投資銀行が相ついで設立され、これを中枢する企業熱が各国に拡がっていった。ダルムシュテッター・バンク (Darmstädter Bank) が設立されたのも一八五三年であった¹⁾。エンゲルスは右のように、フランスでの風潮がドイツにも伝わり、メヴィッセン——ダルムシュテッター・バンク設立の中心人物——はライン州の王者だとし、投資熱はロシアにも波及していること、棉花輸入高から見ても大陸における工業の発展はイギリスよりも大きいことを告げ、「大陸工業のこの巨大な昂揚のうちに、イギリスの革命のもっとも活力ある萌芽が横たわっているのだ」として、大陸における急速な経済——投機の発展を視ているが、マルクスもこの時期、『ニューヨーク・トリビュン』に「フランスのクレディ・モビリエ (The French Credit Mobilier)」と題して (Rubel: Bibliographie, p. 130)²⁾ 三回にわたって続いた通信を送っている (一八五六年六月二十一日、二十四日、七月十一日号所載)。

(1) ただし、ドイツのこれらの銀行はフランスのクレディ・モビリエのように証券投資をもっぱらとする機関ではなく、普通の銀行業務をも行うものであった。つまりいわゆる兼営銀行 (Gemischte Bank) であった。

(2) 参考として、当時のマルクスたちのヨーロッパ政治情勢観を窺うために、往復書簡から抜いておこう。——「デュッセルドルフの労働者からマルクスのもとに派遣された」レヴィ (Levy) 派遣の第二の目的は、ライン州の労働者事情についてよく説明することであった。……連中は……われわれやわれわれの友人が最初の瞬間にただちにかれらのもとに急行するものと、固く信じているらしい。かれらはもちろん政治的および軍事的首領の必要を感じている。これは連中にとつてはまったく無理からぬことだ。しかし、かれらのきわめて自然主義的な計画をもってしては、おそらくわれわれがまだイギリスを離れもしないうちに、かれらは四たびもやつつけられるのではないかと思う。ともかく、できることとできないことを軍事的見地から正確にかれらに示してやる義務がある。もちろんぼくは言つて聞かせた、事情が許せばわれわれはラインの労働者の仲間に加わりたいということ、パリかウィーンかベルリンかのイニシアチヴなしにかれらの独力でやる蜂起 (Emeute) は無意味

だということ、パリが合図を与える場合には、一時的な敗北でさえ一時的な悪結果をもちうるだけであるから、いかなる事情のもとでもすべてを賭けるのがよいということ、……。……ともかくライン沿岸では、フランスに革命が起きるという信念がかなりひろまっているらしい」(一八五六年三月五日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。「……ドイツにおける事の次第は、農民戦争の再版ともいふべきものによってプロレタリア革命を擁護することの可能性いかにかかっているであろう。そうなれば事情は非常によくなる」(一八五六年四月十六日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。

この論説「フランスのクレディ・モビリエ」においては、マルクスは、まず一八五六年五月末のロンドン『タイムズ』紙に公告された一八五五年十二月三十一日現在のクレディ・モビリエ——「皇帝社会主義の主要な先導者」——の決算貸借対照表を掲げ、これによれば六千万フランの資本金にたいして利益金が二千六百万フラン、つまり「四三パーセント三分の一」の利益を上げており、その活動は国債への応募、鉄道、水路、バス、河運、ガス等々の企業に及び、「それはフランスの国境をこえて勢力を拡張し、全ヨーロッパ大陸にわたってこれに類似する諸機関を突らせる種子を播いた」とし、そしてつぎのように記している、——「このようにしてクレディ・モビリエは、われわれの時代のもっとも徹底的な検討を必要とするところのもっとも興味ある経済現象の一つをなしている。このような検討なしには、フランス帝国の見通しを規定することはできないし、またヨーロッパのいたるところに出現しつつある全面的な社会的変動の徴候を理解することもできないであろう」(大月選集訳、第九卷、九一二ページ)。

いまこの論説でクレディ・モビリエの定款として紹介されているものにしたがつて、クレディ・モビリエのメカニズムをかんたんにするしておく、同行は一八五二年十一月十八日の法律によって許可されたものであって、資本金は六千万フラン、一株五百フランで十二万株からなっている。同行は資本金の二倍の一億二千万フランまでの当座預金(および一年以下の短期で発行する債券)を持つことができ、また資本金の十倍の六億フランまで長期債券を発行

することができる。これらが同行の運用資本の限度であり、これを用いて株式会社形態の各種の企業の株券や公債を取得し、または応募する、あるいはこれを担保として貸出を行う、等々の業務を行う。かくてマルクスはいう、「クレディ・モビリエは各種の株式会社の発行にかかるこれらの各種の資本証券とクレディ・モビリエ自身の発行する唯一の証券との交換を行おうとするのである。……ここからして、クレディ・モビリエが自己をフランスの全工業部門の所有者となし、小ナポレオン「ルイ・ボナパルト」をその最高管理者としようとする意図を公然と宣言していることが明白となる。これこそわれわれが、皇帝社会主義と呼ぶところのものである」(大月選集訳、同上、九三ページ)。クレディ・モビリエをサン・シモン主義のボナパルト的实践と見て、マルクスはこう呼んでいたわけである。「ボナパルトは、クレディ・モビリエによって工業を手に入れ、フランス銀行によってフランスの商業を手に入れようとした」(同上訳、九八ページ)。クレディ・モビリエにあまり立入るのは本稿の主題からはずれるのでさし当りこれにとどめるが、一八五〇年代の大陸においてかかる型の「銀行」が勃興し、これが経済を企業熱、投機熱に駆り立てていたことは、来るべき恐慌と深い関連をもつものとして顧慮さるべき一つの重要な事情をなしていたのである。³⁾⁴⁾(そしてさきのプロイセン政府のようにボナパルト政府もその行きすぎを抑制しようとはしていたわけであった)。

(3) マルクスはこの論説のなかで株式会社についてつぎのように述べているが、これはのちの『資本論』において「株式会社——および信用——について述べているところ(第三巻、S. 411—83)と照し合せて見られるべきものといえよう。「定款によれば、クレディ・モビリエは有限責任の匿名組合または株式会社によって組織されるような工業企業だけを支持することができる。その結果、できるだけ多数のこの種の会社を創設し、それと同時にすべての工業企業にこのような会社の形態を付与する傾向が生じている。もちろん、工業への株式会社の形態の適用が現代の諸国民の経済生活にあたりしい時期を開いていることは否定できない。一方では、株式形態の適用は、以前には考えられなかった連合の生産力を明らかにし、個々の資本家の努

力によってはとうてい到達できないほどの規模で工業組織を運転させた。他方では、株式会社には、個人ではなくて資本が結合されていることを忘れてはならない。こうして所有者は株主に、すなわち投機家になった。資本の集中は促進され、その当然の結果として、小ブルジョアの没落が促進された。私的国王というような特殊の種類のものが出現した。かれらの権力はかれらの責任とは逆の関係にある。かれらはただ、かれらが所有する株券の額にたいしてだけ責任をもつ。だが一方ではかれらはこの銀行のすべての資本を管理しているのである(ここからは株式会社一般ではなく、株式銀行、そしてクレディ・モビリエについていっているのであろう)。かれらは、その構成がたえず変動して更新される株主たちとは反対に多少とも恒常的な集団を形成しているのであって、同行の勢力と富の全体を所有することによって従順でない成員を買収する可能性をもっている。この寡頭制的重役会の下位の段階として、同行の理事と代理人たちの官僚主義的集団がある」(大月選集訳、第九卷、一〇五—一〇六ページ)。なお、マルクスはのちの一八五八年九月十四日付論説「イギリスの商業金融」(『トリビュン』一八五八年十月四日号所載。本誌第十二卷第一号の「一八五七年恐慌」(四)の註(11)参照)のなかで、一八五七年恐慌のさい露呈された株式銀行の経営紊乱について記したのちつぎのように述べているが、これはマルクスの株式会社についての意見として看過しえない——そして『資本論』ではしるされていない——重要な記述といつてよいであらう。「これらの株式会社組織の、一国の国民経済のうえに与える影響が急速に増大しつつあることは、いくら高く評価してもしすぎることはないであらうが、しかし明らかにその組織は、しかるべき機構をみずからつくり上げるまでにはまだとていまいたっていない。これらの株式会社組織は、現代社会の生産力発展における強力な楯柱でありながら、まだ中世の同業組合と同じように、個人的責任の感情にかわって——株式組織がこの感情から自由になることができたのはそれ自身の組織そのものによってであるが——固有の団体的意識をつくり上げるまでにはいたっていないのである」(大月選集訳、第九卷、七六—七七ページ)。

(4) クレディ・モビリエについては、マルクスは当時このあとにも、『ニューヨーク・トリビュン』に寄せた経済論説のなかでくり返したたびに触れている。なお同行についての文献としては、J. Plenge: *Gründung und Geschichte des Crédit Mobilier, 1921* があつた。

ここで、この頃マルクスが『ニューヨーク・トリビュン』に寄せた論説のうち本稿に関係があるものについて——材料の上から隔靴搔痒の感があるのでとくに——概観図をえておこう。⁵⁾

(5) 既述のように、リヤザノフ編の *Gesammelte Schriften* は当初全四巻が予定され、この第三、第四巻に一八五六—六二年の諸論説が収録されることになっていたが、一九一七年に第一、第二巻が刊行されたにとどまつたため、収録論説は一八五五年どまりとなっており、一八五六年以降はこのリヤザノフ編書によって見る事ができない。

(一) 一八五六年十、十一月に掲載の *The Monetary Crisis in Europe* [ヨーロッパの貨幣恐慌]。M・リューベルは、これは十月九日号、十五日号、二十七日号 (*The Monetary Crisis in Germany*)、十一月一日号 (*Banque de France* についてのもの)、十一月二十二日号 (プロシヤおよびオーストリーの恐慌についてのもの) の四回にわたって掲げられ、ロシア語版全集の一九三三年刊の第十一巻第一分冊 p. 51—71 に、うち十月九、十五、二十七日および十一月二十二日号の論説が収められている——つまり十一月一日号の分を欠く——としている (*Bibliographie*, p. 131)。大月選集第九巻に「ヨーロッパの経済恐慌」(一)(二)(三)、「フランスの経済恐慌」(一)として訳されているものが、日付から見て右ロシア語訳の四個の論説に当るものと思われる——しかし、リューベルが右の括弧内に入れているようなテーマとは内容的にずれがある——。大月選集の「著作年表」ではこのほかに、一八五六年十一月二十一日頃執筆、『トリビュン』十二月六日号所載として「ヨーロッパの経済恐慌」なる表題を記しているが、これはリューベルの *Bibliographie* にはしるされていない。⁵⁾

(5) 一八五七年一月二十日付エンゲルス宛の手紙でマルクスは『トリビュン』との関係についてつぎのように書送っている、——「ぼくは徹頭徹尾ふしあわせ者だ。約三週間以来デーナ氏は毎日の『トリビュン』を送ってくる、その意図はただ、今後ぼくのものにはなにも印刷しないことをぼくに示すためであることは明らかだ。フランス銀行の動きがかんする約四十行ほどは

例外だが、ぼくの書いたものはただの一行も採られていない。ぼくは毎週『トリビュン』に書くのを延ばしている。……奴らは約四年間ぼくのを(およびきみのも)かれらの名前で印刷して以来、ぼくの名前をヤンキーから隠してしまうのに成功したが、もしそんなことがなかつたら、ぼくの名前は有名になり出していたので、他の新聞を見つけるか、または他の新聞に移るぞといって奴らをおどかすことができたことだろうが。……十の論説のうちおそらく一つが印刷され支払われるとの可能性のもとに、週二回書くことは、それをつづけてゆくにはあまりにつまらないことだ」と。ここで「フランス銀行の動き」云々といっているものは、リユーベルの書にも大月選集の「著作年表」にも、それに該当しそうなものが見当たらない。なお、『トリビュン』との関係はこのとき断絶になりそうになったが、結局、『トリビュン』の方で「週に一論説にたいして、それを印刷してもしなくても支払う。第二の論説(週に二回目の論説)はぼく〔マルクス〕の危険において「印刷されるかされないかを」送る」という提案を出し、マルクスはこれを承諾することとした。——「だから事実上、かれらはぼくを半分にひき下げたわけだ。しかしぼくはこれを承諾する、そして承諾せざるをえないのだ」(一八五七年三月二十四日付マックスからエンゲルスへの手紙)。

(二) 大月選集の「著作年表」では一八五七年一月二十三日執筆として「金融問題について」と仮題した論説をしるし、『トリビュン』に掲載されず、原稿紛失としている。この論説はリユーベルの *Bibliographie* にはしるされていないが、マルクスが一八五七年一月二十三日付エンゲルス宛の手紙のなかで「ぼくはこれ『トリビュン』に今日一つの金融物(ein. Finanzielles)を送った」とし、二月六日付同じくエンゲルス宛の手紙で「トリビュンの態度はぼくが予想したとおりだった。またも一行も載せない」と書いているものが、これであろう。

(三) リユーベルは一八五七年五月十六日、三十日、六月一日、二十日の諸号に掲載されたものとして (*Le Cr dit Mobilier et la crise financi re en France*〔クレディ・モビリエとフランスの金融恐慌〕) なる論説を挙げ、このうち六月二十日号所載の論説がロシア語版全集第十一卷第一分冊 P. 101—8 に収められているとしている (P. 133)。大月

選集第九卷に「フランス銀行にかんする新法律」として訳されているものが、日付から見て右ロシア語訳の論説に当るものと思われる。大月選集の「著作年表」では右の五月十六日から六月二十日にいたる四号に掲載のものとして、この「フランス銀行にかんする新法律」のほかに、「イギリスの取引所詐欺師たち」、「フランスのクレディ・モビリエ」、「フランスの金融恐慌についての二論文」、「フランスの金融恐慌」という論説をしるしているが、これらはすべて右でリュール掲げているものに該当するものであらう。

(四) リューベルは一八五七年七月二十七日号に掲載されたものとして (*Crise financière et commerciale en Europe* 「金融恐慌とヨーロッパの商業」) なる論説を挙げ、これは同上ロシア語版全集第十一卷第一分冊 p. 109—112 に収められているとしている (p. 134)。大月選集第九卷に「フランスの金融情勢」として訳されているものが、日付から見てもリュールの掲げているこれに——あるいはこれの一部に——当るものであらう。

(四) リューベルは一八五七年九月二十六日号に掲載されたものとして (*Crise financière / Le Crédit mobilier* 「金融恐慌。ークレディ・モビリエ」) なる論説を挙げ、これもロシア語版全集第十一卷第一分冊 p. 120—3 に収められているとしている (p. 135)。大月選集第九卷に「フランスのクレディ・モビリエ」(二)として訳されているものが、日付から見てもリュールの掲げているこれに——あるいはこれの一部に——当るものであらう。

(六) リューベルは一八五七年十一月二十一日、三十日、十二月十五日、二十二日の諸号に掲載された四箇の論説として (*La crise financière et commerciale* 「金融恐慌と商業」) なる論説を挙げ、このうち十一月三十日号所載の論説 (*The British Revulsion*) がロシア語版全集第十一卷第一分冊 p. 124—9 に収められているとしている (p. 136)。大月選集第九卷に「イギリス商業の激動」として訳されているものが、日付から見ても右ロシア語訳の論説に当

るものであらう。大月選集の「著作年表」では「ヨーロッパの経済恐慌」(十一月二十一日号)、「イギリス商業の激動」(十一月三十日号)のつぎに、「ヨーロッパの経済恐慌についての三論文」(十二月十五日、二十二日、一八五八年一月五日号)、「フランスの商業恐慌」(一月十二日号)という記録をしているが、この一八五八年一月五日、十二日号所載のものは、リュールベルの *Bibliographie* ではつぎの、別のグループとして整理されている。

(6) 「デナから二つの手紙を受取った。……第二のは、商業恐慌のためぼくとベイヤード・テイラーのほかはヨーロッパの全通信員を解約したということ、ぼくもしくは今後は一週一論説に嚴格に制限せねばならぬということ。ぼくはこの頃この制限を破ろうと試みていたのだが、当分もっぱらインドでの戦争と金融恐慌(Financial Crisis)とについて書くべきだとのことだ」(一八五七年十月三十一日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。

(七) リューベルは一八五八年一月五日、十二日、二月九日、三月十二日、五月十二日の諸号に掲載された五つの論説として (*La crise économique en Europe* [ヨーロッパの経済恐慌]) なる論説を挙げている (p. 137-8)。大月選集の「著作年表」ではさきの一月五日、十二日号所載の論説のあと、「ヨーロッパの経済恐慌」(二月九日号)、「フランスの経済恐慌」(三月十二日号)、「ヨーロッパの経済恐慌」(四月三十日号——リュールベルの *Bibliographie* では第五論説として 5. *NYT*, 12 mai 1858, p. 6, col. A. Editorial date de Londres, 30 avril 1858 としている、つまり四月三十日は執筆日付となつている) という記録をしており、これらのうち、「フランスの商業恐慌」と「フランスの経済恐慌」(七)の二つは大月選集第九巻に訳されている、——リュールベルはロシア語訳があることを記していないが、大月選集があるところから見るとロシア語訳があるのであらう。

(八) リューベルは一八五八年六月二十一日号に掲載されたものとして *The State of British Commerce* 「イギリス商業の状態」(執筆日付同年六月八日) なる論説を挙げている (p. 142)。大月選集の「著作年表」で「ヨーロッパ

の「經濟恐慌」と記録しているものが、日付から見てもこれに当るものであらう。この「著作年表」ではこのあと「ヨーロッパの經濟恐慌」(一八五八年七月二十三日号)としているものがあるが、これはリューベルの *Bibliographie* (p. 142) で一八五八年七月二十四日号の『トリビュン』に掲載され、ロシア語版全集第十一卷第一分冊 p. 332-6 に (daté du 23 juillet 1858) として収められてゐるとしてゐる仮題 (*Liquidation de la Compagnie des Indes*) なる論説と同じときに掲載されたものであらう。いずれにしても *The State of British Commerce* もこれも、ロシア語版全集に収められていない。

(九) リューベルが (*La loi de banque de Robert Peel et ses conséquences* [ロバート・ピールの銀行条例とその結果]) と仮題し、一八五八年八月二十三日および八月二十八日の『トリビュン』に掲載され、ロシア語版全集第十一卷第一分冊 p. 404-12 に収められてゐるとしてゐる二つの論説 (p. 143)。大月選集第九卷に「一八四四年のイングランド銀行条例の効力停止」、「商業恐慌と貨幣流通」として訳されているものがこれに当る。

(一〇) 一八五八年十月四日号所載の *British Commerce and Finance* [イギリスの商業と金融] (執筆日付同年九月十四日)。リューベルによるとこれはロシア語版全集第十一卷第一分冊 p. 413-5 に収められてゐる (p. 144)。大月選集第九卷に「イギリスの商業と金融」として訳されているものがこれに当る。この(八)、(九)については、本誌第十二卷第一号の「一八五七年恐慌」(四)の註(11)を見られたい。

(11) リューベルは一八五九年二月一日号に掲載されたものとして *The Money Panic in Europe / Affairs in Prussia* [ヨーロッパにおける貨幣恐慌……] なる論説を挙げ(執筆日付パリ、同年一月十三日およびベルリン、同年一月十一日)——大月選集の「著作年表」でもかかるものとしてゐる——、うち後者だけがロシア語版

全集第十一卷第一分冊に収められているとしてゐる (p. 147)。

(三) 一八五九年五月十二日号所載の The Financial Panic [金融パニック] (執筆日付同年四月二十九日)——(リユーベル, p. 147)。リユーベルはロシア語訳があることを記していないが、大月選集第九卷に「金融パニック」として訳されているものがこれに当る。

(四) 一八五九年九月二十三日号所載の Manufactures and Commerce [製造業と商業]——(リユーベル p. 150)。これもリユーベルはロシア語訳があることを記していないが、大月選集第九卷に「工場工業と商業」として訳されているものがこれに当る (執筆日付同年九月五日)。なおこの論説については本誌第十二卷第一号の註(2)および(13)を見られたい。

(四) 一八六〇年十一月二十四日号所載の A Money Stringency [貨幣逼迫] (執筆日付同年十一月十日)。リユーベルによるとこれはロシア語版全集の一八三三年刊の第十二卷第二分冊 p. 164—5 に収められている (p. 154)。大月選集第九卷に「大ブリテン—金融市場の緊迫状態」として訳されているものがこれに当る。

右のほか、リユーベルの Bibliographie および大月選集の「著作年表」のうえで、イギリスの商業、製造業に关して『トリビュン』に寄せた論説名がいくつか見受けられるが、表題だけでは本稿の目的とどの程度かゝれんがあるのか判然としないので省いておいた。しかし、このうち、ロシア語訳があるのであろうか、大月選集第九卷に訳出されているものも若干あり、これらのなかでのちに部分的に利用するものもある——それについてはそのとき断っておく——。

以上見てきたように、これらのマルクス執筆と見られている——というのはこの時期のはほとんど無署名であるか

ら——『ニューヨーク・トリビュン』に寄せた論説のうち、ロシア語版全集に収められているものもあるし、重要と見受けられるもので収められていないものもかなりある。しかしロシア語版全集に収められているものは大月選集第九巻に——これがこの全集を底本としたものかどうかは明らかでないが——すべて収められているようである。事実上、以下使用する『トリビュン』の論説はこの大月選集訳によるが、今日判明しているかぎりにおいて本稿の目的に關係あるものでどのようなものが書かれていたか、そしてそのうち本稿で使用するものはどのようなものであるかを概観しておくために——今後これらの論説の英文のオリジナルが集成さるべきことを期待しつつ——あらかじめここに一括して記しておいた次第である。

一四

一八五六年九月。——「金融市場の状況をきみはどう思うか？大陸における割引率の引上げは、一部は明らかに、カリフォルニアおよびオーストラリアの金のために銀が金にたいして騰貴したこと、および（ベルギー銀行は一ナポレオン金貨にたいして（銀）一九フラン四〇サンチームしかひきかえない）したがって金と銀が法定のスタンダードであるところではどこでも地金取扱業者が銀行から銀を引出していることと、關係をもっている。割引率引上げの原因がなんであるにせよ、とにかくそれは巨額の *Schwindel* 取引とまたとくにバリの大質店 (*Grand pawningshop*) 「クレデイ・モビリエを指してこういっているのであらう」との没落を促進する。大貨幣恐慌が「起きるのが」一八五七年の冬を越すだろうとは思われぬ (*Ich glaube nicht, daß die große monetäre Krise das Jahr 1857 über-wintern wird*)。イギリス人中の間抜け共は、このたびは大陸と対照的に自分たちのところではすべてが健全だ、

と想像している。スレッドニードル街の老夫人「イングランド銀行」とバリの商社との間の親密な結びつきは別として、この驢馬どもは、イギリス資本の大きな部分が大陸の信用のなかに投ぜられていること、またかれらの『健全な』過度の取引（overtrading）（輸出は今年は一一〇百万ポンドに達するだろうとのことである）が——一八五四年から一八五六年にいたるかれらの文明宣伝（Zivilisationspropaganda）が一八五一年のクーデターにもとづいていたのとまったく同様に——大陸の「不健全な」投機にもとづいていることを、見逃がしている。以前の恐慌とちがって、たしかにこのたびはフランスが、もって Schwindel を全ヨーロッパにわたって拡めえたしまた拡めているところの形態を、発見した。『しかし』サン・シモン主義の大陸の洗練とか株式投機とかイムペリアリズムとは対照的に、イギリスの国内投機は単純かつ露骨な詐欺という素朴な形態に（zur primitiven Form des simplen und unmitigated fraud）立戻ったらしい。かくして、ストラターヘン（Straton「と記されているが Strahan の誤りであろう」）、ポール（Paul）、およびベイツ（Bates）や、故サドラーの思ひ出のティペラリー・バンク（Tipperary Bank of Sadlers [Sadleir's] memory）や、タヴィットソン、コールの商会（Davidson, Cole and Co.）の大シテイ詐欺や、そしていまロイヤル・ブリティッシュ・バンク（Royal British Bank）、最後に水晶宮事件（Kristallpalast-geschichte）（四千の偽造株券が流通に投入された）「これらについては後述」。ところがこの、イギリス人が外国では大陸の旗のもとに投機をし、国内では単純な詐欺に立戻っていることを、連中は「商業の健全な状態」と呼んでいるのだ。／＼とにかくこのたびは事態は以前にはなかったようなヨーロッパ的な拡がりをもっており、われわれがなお長く当地で傍観していることができないとは思われない」（一八五六年九月二十六日付マルクスからエンゲルスへの手紙。なお、この手紙のはじめの方で、マルクス夫人が遺産相続としてニードルシュレージエン鉄道債券を受取ることになったが、一般的

な有価証券相場の値下りのため大きな損失をしてしか売れないというので、ドイツから送金がまだないこと（九月二十二日付マルクスからエンゲルスへの手紙）について、「大陸の取引所における目下の恐慌はわれわれ個人にとっては具合が悪い」と記している。もって、すでに大陸——ドイツ——の取引所に相場低落が生じていたことを窺うことができた。——これにたいするエンゲルスの返事、「金が銀にたいして下落していることは、いまではもはや疑う余地がない。また銀が消え去っていることもたしかだ、しかし、どこに消え去ったかぼくにははっきり分らない。シナでは混乱状態にさいして「いわゆる『太平天国』の乱を指しているのであろう」たくさん埋められ隠されたにちがいない。そこで近年の貿易収支は、イギリス、大陸、アメリカを合せたものにとって逆、インドおよびシナにとって非常に順となっている（「支払収支はアジアにとって順、ヨーロッパおよびアメリカにとって逆でありうる」（『資本論』第三卷 S. 617）。ともかく、すでに今日一ポンドにつき六ペンス値下りしていることは、ジョン・ブルにとってきわめて快適なことだ（これは逆説的にいっているのである）。

／金融市場の暗雲はおそろしく濃くなっている。……百万「ポンド」の金が出出されたというこの前の火曜日の（「イングランド」銀行の件は、特記すべきことだ。事態はいまやすでに噴出したかのように見えるが、しかしこれもただ序曲でしかありえない。理論的には、顛覆（Sturz）がくる前にまずロシアが完全に Schwindel に捲きこまれていなければならぬだろう。……今度はいまだかつてなかったような審判の日がきて、全ヨーロッパの産業が破綻し、すべての市場が供給過剰となり（インドへはいまでもすでににも送っていない）、すべての有産階級が捲きこまれる。ブルジョアジーの完全な破産、戦争、最高度の乱脈。ぼくもまた、すべてこれらのことが紀元一八五七年に実現されるだろうと思う」（一八五六年「九月二十六日」〔？〕⁸⁾付エンゲルスからマルクスへの手紙）。

（7）銀の金にたいする騰貴についてエンゲルスはさきのマルクスの手紙に答えてこう述べているが、マルクスはさらに一八五

六年十月十六日付のエンゲルス宛の手紙で「最近二三週間銀の件をさらにくわしく調べた、これについては折を見てきみにお知らせしよう」と書いている。このあとこれについてエンゲルスにたいして書いた手紙は見当たらないが、『トリビュン』一八五六年十月二十七日号所載の論説のなかで銀問題について——のちに概略を見るように——ややくわしい考察をしており（大月選集、第九卷、一六一二〇ページ）、これがこの「くわしく調べた」ことのすくなくとも一部であったのであらうと思われる。

なお、マルクスは上の一八五六年九月二十六日付の手紙では「カリフォルニアおよびオーストラリアの金のために銀が金にたいして騰貴している」と述べているが、一八五九年刊の『経済学批判』では「いままでのところでは、オーストラリアその他の『金鉱の』発見は、金銀の価値関係にまだ影響していない。なるほど、ロンドン市場における銀の付け値の示すところによれば、一八五〇—一八五八年間の銀の平均金価格は、一八三〇—一八五〇年の期間にくらべてはぼ三パーセント足らず高い。しかしこの騰貴は、アジアでの銀の需要からかんたんに説明される。一八五二—一八五八年の間に、銀の価格はただこの需要に伴つて個々の年および月に変動しているのであつて、あらたに発見された産地からの金の供給に伴つて変動しているのではけつてない」（S. 153）と述べている。この「アジアでの銀の需要」というのは、上のエンゲルスの手紙でいつている退蔵用のものであらう。ちなみに、『経済学批判』のここでマルクスが掲げているロンドン市場での銀（一オンス）の金価格を見ると、一八五六年には三月六〇ペンス、七月六一 $\frac{1}{4}$ ペンス、十月六二 $\frac{1}{2}$ ペンス（これは掲げている一八五二年三月—一八五八年三月の間の最高）という騰貴を示している。この金銀比価については、一八八二年三月十日付ベルンシュタイン宛のエンゲルスの手紙（Briefe über „Das Kapital“ 所収）、『資本論』第一巻第一篇注一〇八における第四版（一八九〇年）へのエンゲルスの加筆参照。

(8) この日付は Briefwechsel インスティトゥート 版編集者の推定によるものであるが、このエンゲルスの手紙は九月二十二日付および上の九月二十六日付のマルクスの手紙にたいする返事として書かれているものであるから、このマルクスの手紙と同じ日付と推定しては具合が悪いであらう。そのうえ、エンゲルスのこの手紙には、上掲のように「百万の金が出出された」というこの前の火曜日の（vorigen Dienstag）銀行の件は「云々と書かれているが、これはのちに見る『トリビュン』一八五六年十月二十七日号所載のマルクスの論説のなかで、「フランス銀行はやくも九月三十日に百万ポンド以上の額の借入をイングランド銀行に頼み込まねばならなくなつた」と書かれている事態を指しているものと見受けられる。そして一八五六年

九月三十日は暦を調べてみると丁度火曜日に当たっている。したがって、エンゲルスのこの手紙はすくなくとも十月に入ってから書かれたものと見られるべきであらう、と思われる。

マルクスが『ニューヨーク・トリビュン』に前記「ヨーロッパの貨幣恐慌(The Monetary Crisis in Europe)」なる一連の論説を書きはじめたのは右の一八五六年九月二十六日付エンゲルス宛の手紙を書いたのと同じ九月下旬と見受けられるが、これらの論説では右の手紙で述べているとほぼ同じ事柄についてやや立入って述べられている。つぎにこの論説を引抄しつつ見てみよう。

『トリビュン』一八五六年十月九日号論説(大月選集、第九卷、一六六ページ)。マルクスはまず、「ヨーロッパの現在の投機時代の特色は、その投機が普遍的な性格をもっていることである」として、これまでの「一八一七年、一八二五年、一八三六年、一八四六―四七年の各大商業恐慌のとき」にはすべての商工業部門がなんらかの形で刺戟を受けたとはいえ「各々の時期に特別の色合いと性格とを与えたものはただ一つの主要な投機熱であった」が、これに反して、現在の投機熱の担い手であるクレディ・モビリエの指導原理は投機の集中化とともにその普遍化であるとする。そして現在の投機熱のいま一つの特異性はイギリスではなくフランスではじまったことであり、現在のフランスの投機者と従来のイギリスの投機者との関係は「十八世紀のフランス理神論者と十七世紀のイギリス理神論者との関係と同じ」であつて、一方は「内容」を与え、他方は理神論が十八世紀に全文明世界に普及することを可能にした一般化の「形式」をつくり上げたのであるという。ついで、イギリス人は投機がイギリスから大陸に遠ざかったと思つてゐるようだが、しかしそれは、フランス銀行の月次報告書はイングランド銀行の金準備に影響を与えずにはおかないこと、「ほかでもないイギリス資本こそがヨーロッパのもろもろのクレディ・モビリエの動脈に不死の妙薬を主と

して補給している」こと、イギリスの輸出額は一一〇百万ポンドという大きな額に達しているがこのイギリスの「健全」さは大陸の「不健全」さと同じ生みの子であること、これらを忘れてゐるものと指摘する。しかし——とマルクスはいふ——「イギリスの投機は、大陸的繊細さとはするどい対照を示して、大っぴらの、飾り立てられもしなければならぬものによつてもやわらげられないペテンの、もつとも素朴な形態に立ち帰つたのである。單純な詐欺というものが、ボールやストラッペンやベイツの、ティペラリー銀行の、そしてまた、コール、ダヴィッドソン、ゴードンの大シティ銀行のサドラー式取引の神聖な思い出の全祕密をなしていたのだ〔訳は前記のように大月選集による〕。そしてこの詐欺はまた、ロンドンのロイヤル・ブリティッシュ・バンクのうら悲しい單純な物語をあらわしている」と。マルクスはついで、このロイヤル・ブリティッシュ・バンクの乱脈な経営についてくわしく述べているのであるが、右に見られるように、この論說でマルクスがいおうとしていることはさきの手紙のなかで要約的につくされてゐると思われることができる。ところで、さきの手紙でまたこの論說でマルクスが述べているイギリスでの投機の「單純かつ露骨な詐欺」という形態であるが、これは当時イギリスにおいてつぎつぎにさらけ出されて、世のセンセーションをひき起こしていたものようであつて、D・M・イーヴァンスはつぎのように述べてゐる。——「最後の激発にいたるすこし前に、商業道徳が陥つてゐた低級な状態がそれぞれ別個の事例によつて明るみに出され、これらの事例は相ついで当時の主要なトピクスとなつた。コール（Cole）、ゴードン（Gordon）、ダヴィッドソン（Davidson）の取引、ティペラリー・バンク（Tipperary Bank）の破綻、ジョン・サドラー（John Sadler）氏の自殺、Westminster Improvement Company の曝露、ロイヤル・ブリティッシュ・バンクの爆発などが、かかるものであつた。だが、スコットランド、リヴァプール、およびロンドンにおいて行われていた商業制度のまったくの腐敗は、一八五七

年の末にいたるまではその全貌は明るみに出されなかったのであって、このとき「一八五七年末」、高い繁栄を指し示していると思われる商務省報告書のきわめて大きな数字が、圧倒的な量の融通手形に基づいていたものであることが立証されたのであった」(D. Morier Evans; The History of the Commercial Crisis, 1857—58, London, 1859, p. 10—)。これで見ると、マルクスが挙げているのは、当時世の噂になった事例であったことを窺うことができる。なお、イーヴァンスの書では、支払停止 (suspension) となった商社、銀行のリストが一八四九—一八五八年にわたって掲げられているが、それによると、一八五四年六月のところには四商会の名が挙げられているが、そのなかに Messrs. Davidson and Gordon, London, produce brokers and metol agents および Messrs. Cole Brothers, London, East India merchants and metal brokers と、ダヴィッドソン、ゴードン、コールの名が見え (Appendix, p. xlix) 、『また一八五五年六月のところに挙げられている五商会の一つとして Messrs. Strahan, Paul, and Bates, London, banlcers としゑられている (Appendix, p. lxiv) (この銀行業者ストラーヘン商会については、計理士による同行の資産、負債の調査報告書も掲げられているが——p. lxxvii—xxxiv——、それによると、この銀行業者ストラーヘン商会はチャールズ二世の初期に遡るもっとも古い銀行業者の一つで、破産のときのパートナーは William Strahan, Sir John Deon Paul, Robert Makin Bates であつた云々としてゐる)』。また Tipperary Joint-Stock Bank, Ireland, bankers の名は、一八五六年二月に支払停止となった十二商会の一つとして見出される。「一八五六年に国会議員で前 Junior Lord of the Treasury のジョン・サドラーの死体がハンプステッド保養所で発見された。サドラーはみずから毒を盛つたのである。かれの死後、かれが一連の巧妙な詐欺によってティペラリー・バンクから二十万ポンドを奪ひ取つたことが明らかにされた。同行は支払停止をせざるをえなかった。サドラーはまたスウ

エーデン鉄道会社の偽造株を十五万ポンドも発行していたし、またにせの地券や引受手形やあらゆる方面の有価証券を発行していた。サドラーはロンドン・アンド・カウンティ・バンクの頭取であったので、こうした事実の発覚は大きなセンセーションを呼んだ」（E. T. Powell; *The Evolution of the Money Market*, 1915, p. 365. なおパウエルは「近年、サドラーはアメリカに逃げたのであり、死体はかれではなかったといわれている」とつけ加えている。そうだとすると、死んだというのもまた詐欺であったわけである）。また「この年「一八五六年」おそくなって、水晶宮会社（Crystal Palace Company）の株式書替を操ることによって、W. J. Robson が優先株式現在高を一〇、七九三ポンドふやし、既発普通資本金を一七、二三〇ポンドふやすことをやってのけたというニュースが伝わった。詐欺の合計額は二万八千ポンドであった。取引をキャンセルすることは不可能であったので、これらの額はやむをえず同会社の資本金現在高につけ加えざるをえなかった」（Powell; *op. cit.* p. 365）。

このように当時イギリスにおいて「単純かつ露骨な詐欺」がしきりに行われ、さらけ出されていたが、一八五六年九月にはロイヤル・ブリティッシュ・バンクが支払停止となった。「一八五六年九月二十日に開かれたロイヤル・ブリティッシュ・バンクの株主総会の席上、要約された業務計算書がJ・E・コールマン（Coleman）氏から提出されたが、それによると負債が五三九、一三一ポンド一二シリング九ペンス、一方資産は外国業務を除いて二八八、六四四ポンド八シリング一一ペンスだと示された」（Evans; *op. cit.* Appendix, p. xcvi. なお同書には、J・E・コールマンの評価した一八五六年九月三日現在の同行の計算書と、同行の公式帳簿による同日現在の計算書とが対照して掲げられている）。マルクスが九月下旬に上掲のような『トリビュン』への論説をまたエンゲルスへの手紙を書いたのは、丁度同行のこの破綻が暴露されたすぐあとであったわけである。

マルクスは同行の乱脈な経営についてつぎのように述べている。同行の重役には「二つの部類」があったのであって、一方の重役はただ俸給を受取るだけで銀行の事業についてなにも知らないでいたが、他方の重役は私消するために実際に銀行の管理に従事し、この後者の重役は支配人、監査役、顧問弁護士を抱き込み、自分や縁故者に貸付を与えたばかりでなく、かいらい名義をつくってその貸付を着服した。業務開始のはじめから同行は欠損であったが、株主にたいしてはごまかした報告書を出して毎期配当をつづけ、「銀行がもはや完全に支払不能に陥ったとき、新株が発行され、それとともに業務の成功を伝える誇大な報告書が出され、重役の信任投票が行われた。この新株発行はけっして銀行の窮状を救う最後の死にもぐるいの手段としてではなく、單純に重役の詐欺にとつてあたらしい材料を与える方法として予定されたものであった」。マルクスはさらに、支配人カメロンが二重帳簿をつくっていたことがカメロンの病氣中はじめてわかったという「実直な」重役の談話を引き、また同行がウェールズの製鉄工場と馴合いの貸付取引をしていたことをしるし、そしてこの論説をこう結んでいる、——「現在は破産裁判所で銀行の清算が準備されている。しかし、清算が行われるよりずっと前に、ロイヤル・ブリティッシュ・バンクのこの全冒険は、ヨーロッパの一般的恐慌の洪水によって吞込まれてしまふであらう」と。

だが、当時のイギリスの歴史の上において、このロイヤル・ブリティッシュ・バンクの破綻はまだ個別的なものにとどまり、ロンドン金融市場の一般的な崩壊にそのままつづいてゆくものではなかった。「一八五六年の九月に、シテイおよび国民は、一八四四年の法律（一八四四年の株式銀行法のこと）のもとでの特許状（チャーター）によって一八四九年に設立された株式会社であり、スレッドニードル街の店舗と六つの営業支店をもつロイヤル・ブリティッシュ・バンクの破綻の結果として、手荒いショックを受けた。……この支払停止は人々を非常に驚かせ、そしておのずから、他の諸銀行の

安定性についての疑惑をひきおこした。しかしながら、次第に、この破綻は一般の状態が逆調であることに因ったものではなく、この銀行の経営がまったく誤っていたためであったことがわかってきた。同行の取締役および総支配人が、資金がかれらの責任に委ねられたものであることを顧みずに、銀行業についての公認の原則をすべて破っていたことがさらけ出された。……ロイヤル・ブリティッシュ・バンクの破綻は必然的にロンドン金融市場にかなりの不安をひきおこし、そして市場の資力およびイングランド銀行の準備金の双方にたいする通常の秋季の逼迫をいちじるしく強めた。大きな融資需要につづいて、十月一日にバンク・レートは「イングランド銀行」総裁の自己の責任において（この日は理事会の日ではなかったのだ）五パーセントに引上げられ……」（S. Evelyn Thomas: *The Rise and Growth of Joint Stock Banking*, vol. I, p. 484~5. トーナスはこのように、ロイヤル・ブリティッシュ・バンクの破綻によってロンドン金融市場の不安がひきおこされ、このため、イングランド銀行にたいする融資需要が強まったので、バンク・レートの引上げが採られたかのような記述の進め方をしているが、マルクスはすぐあとに見るように、このバンク・レートの引上げをフランスからの金需要——これはまたドイツからの影響を受けたものであったと説かれている——があったことから説明している。のちに見るように当時のイングランド銀行総裁が一八五七年の銀行条例委員会で行った証言でも「大きな需要」が生じたので十月一日に五パーセントに引上げたと述べているが、この「大きな需要」は、国の内外両方からのものであったとしても、おそらくマルクスの挙げているフランスからの需要が主たるものであったのではなからうかと推測される。

一五

『トリビュン』所載のマルクスの論説を見ることをつづけてゆこう。

『トリビュン』一八五六年十月十五日号論説（大月選集、第九卷、七一二ページ）。ここでマルクスは当時の事態を一八四七年恐慌のさいと比較してつぎのように述べている、——「一八四七年の秋頃ヨーロッパではじまり一八四八年の春までつづいた一般的な商業恐慌は、一八四七年の四月下旬にはじまり五月四日に頂点に達したロンドンの金融市場でのパニック『独立的な貨幣パニック』——筆者稿「一八四七年恐慌」註（19）参照」によって口火を切られた。このパニックの期間中、一切の貨幣取引は完全に停止した。しかし五月四日以来緊張は弱まりはじめた。それで商人や新聞記者たちは、このパニックがたんに偶然的な一時的な性質のものだといって互いに祝福し合った。ところが数カ月たつて商業および工業恐慌「一八四七年十月の恐慌」が勃発したのであって、金融パニックはその恐慌にとって徴候と前触れでしかなかったのである。／現在ヨーロッパの金融市場では、一八四七年のパニック「右の四月下旬—五月上旬のそれを指すのであらう」に似た動きが生じている。しかしながら類似はこの場合完全ではない。「第一に」一八四七年のときのようにパニックは西から東へ、すなわちロンドンからパリを通じてベルリンおよびウィーンへと動いてゆくかわりに「この「一八四七年のときのように」というのも行文上十月恐慌を指しているのではないであらう。しかし、十月恐慌のときはたしかにこのような動き方をしたが、四月パニックのさいこうした事実があったことは筆者は知らない」、現在のパニックは東から西へ動いている。それはドイツではじまり、そこからパリに拡がり、最後にロンドンに達したのである（このプロセスはつぎの一八五六年十月二十七日号の論説のややくわしく考察されている）。「第二に」さきの場合「一八四七年四月—五月」には前進運動がゆるやかだったため、パニックが局地的性格を帯びていた。だが現在は、その波及が急速なことから、ただちにパニックが一般的な性質のものであることがわかるのである。「第三に」さきにはパニックは約一週間つづいたにすぎなかったが、現在はすでに約三週間もつづいている（二週間、三週間といっているのはいずれもロンドンで

のことであろう」。「第四に」 当時はパニックを一般的な恐慌の前触れではないかと思つた者はほとんどわすかであつたが、今度はそのことを疑う者は、『タイムズ』紙を読んで歴史をつくらうと思つてゐるような「意味がわからない。おそらく誤訳であろう」イギリス人を除いては、だれ一人としていない。「第五に」 また當時はどのような達眼の政治家でも、一八二五年と一八三六年との「いずれも恐慌の年」くり返しを気づかつたぐらいにすぎなかったが、現在ではかれらは、一八四七年の恐慌だけでなく、さらに一八四八年の革命のあたらしい増補版が自分たちの前にあることを信じてゐる「この「達眼の政治家」のなかには一八四七年當時のマルクスも、またいまのマルクスも入つてゐると見てよい」。

このようにマルクスは、基本的に一八五六年九月中旬―十月上旬の現在の事態を一八四七年四月パニック當時と似てゐると見、つまり、したがつて一般的恐慌の前触れであると見、そのうえに立つて、前の場合と今度の場合とのちがいを述べてゐる。挙げられてゐる相異点のうち、第一の「東から西へ」動いてゐるということは、當時の事態において重要な動きであつたと見られる。そしてこれについてマルクスはつぎの論説でややくわしくそのプロセスを述べてゐる。

この十月十五日号論説のこのあとでは、マルクスは、「ヨーロッパの上流階級」は「一般的な破産に直面」してゐる、かれらはいまや「あらゆる市場が入荷の過剰で苦しんでゐること……これまでは伝染性害毒には動じなかつたような所有者階級の全階層までもが、いまでは投機熱の渦巻にひきこまれてゐること……この渦巻からはヨーロッパのただ一つの国も免れなかつたこと」を知つてゐるとし、「一八四八年には、革命を直接ひきおこした諸事件は純政治的な性格のものであつた」が、今度は「労働者階級の秘密結社の潜行的陰謀によってひきおこされた革命ではなく、支配階級自身の所有に属する種々様々のクレディ・モビリエの大つぴらの陰謀によって呼びおこされた革命なのであ

る、そしてかれらはまた、一八四八年の革命にたいするかれらの勝利そのものが「つまり革命を挫いた経済的繁栄そのものが」一八四八年の思想的潮流のための「つまり革命的思想のための」物質的諸条件をつくり出すのを促進した、ということを意識したという悲哀があるのであり、「一八四九年なかばから現在の瞬間にいたるまでの全期間は、このように、古いヨーロッパの社会にたいしてその一切の傾向を最後にもう一度凝縮した形で示す可能性を与えるために歴史から贈られたところのたんなる息つきという形で現われている」、というようにきわめて調子高く述べ、ついで、ヨーロッパの現在の金融パニックはまず最初にドイツに現われたが、ドイツ人は戦争「クリミア戦争」に中立を保つことによってフランスに比し多くの資本を蓄積したのであり、「クレディ・モビリエは手本を示してドイツの投機の土台を築いておきながら、その土壌から成長した投機および信用諸制度のゆたかな収穫に自分でびっくりした」、ドイツは「六十二の国民議会」があるというように国内に中心がいくつもあり、「このような国は、クレディ・モビリエが教えた種々様々の思いつきを、この上もなく短期間に、あらゆる方向にわたって企てるのにまったくもってこのところ」であって、ここにパニックがどこよりも最初にドイツに現われ、どこよりも広く拡がったことの直接の原因があるとしている。

ドイツのこの「金融パニック」は本稿の取扱対象としては間接的なものであるので、ここではマルクスがこう述べていることを掲げるとどめて、ひきつづきつぎの論説を見てゆくこととしよう。

『トリビュン』一八五六年十月二十七日号論説（大月選集、第九巻、一三—二〇ページ）。マルクスは右の十月十五日号論説のおわりで「今後の論文の一つで、パニックそのものの歴史を述べるとともに、その直接の原因を考察することとしよう」と記しているが、それにつづくこの論説で、このたびのパニックのプロセスならびにその「直接の原因」

について述べている。すなわち、まず、「ドイツの金融恐慌は九月なかば頃にはじまって、同じ二十六日に頂点に達し」〔さきの一八五六年九月二十六日付マルクスからエンゲルスへの手紙の末尾に記しておいたところを見られたい〕、その後次第に弱まっていった」が、前の論説と同じくこれを一八四七年恐慌のさいの四月パニックに似たものだとし、当時四月パニックが十月恐慌で金融機関をとらえたのと同様に、「今度のパニックの基礎にあるものが貨幣の流通手段の不足ではなくて、自由な資本と現存の工業、商業および投機的諸企業の広大な規模との間の不均衡であるかぎり、まもなくドイツにも一八四七年のイギリスのさいと同じ結果が現われるであろう」と述べ、そしてついで、このドイツのパニックがフランス、イギリスにつきのように波及していったことをしるしている。「パニックを一時克服するのに役立つ手段」は「割引歩合の引上げ」であつたのであつて、この引上げによって「金の流出は止み、外国生産物の輸入は麻痺し、外国資本は誘惑的な高率にひきつけられた」。だがドイツではこれでパニックが一応納まったとしても、他方フランスの方は対外的な投資や輸入を正貨で支払わねばならなくなり、「このようにして金融パニックはフランスにはねかえり、そこでたちまちドイツよりもっと險悪な形を採った」。フランス銀行はドイツの銀行に倣つて割引歩合を六パーセントに引上げ、同行は「はやくも九月三十日に百万ポンド以上の額の借入をイングランド銀行に頼み込まねばならなくなった」〔さきに掲げたのはここ。なお、当時フランスでは金銀の現実比価と法定比価とのギャップのためフランス銀行から銀が引出されたと見るならば、この銀がイギリスに送られ、金がイングランド銀行から引出されるわけである。この動きが大きければ、イングランド銀行の金準備はどんどん減ることになり、そしてフランスの事態がイギリスに波及していった主要ルートはこの金流出であつたであらうと思われる。したがつて、ここ、フランス銀行がイングランド銀行に「借入」をしなければならなかつたということは、どういう必然的な理由からであつたのかよくわからない〕。これに応じて十月一日にはイングラ

ンド銀行は、木曜日の定例理事会をも待たないで割引歩合を五パーセントに引上げたが、この措置は一八四七年の金融パニックの時以来前例を見なかったものである。しかしこの利子率の引上げにもかかわらず、金は毎日四万ポンドづつスレッドニードル街の地下室から流出しつづけた。そして一方フランス銀行は：毎日ほぼ六百万フランの正貨を手離さねばならなかった。イングランド銀行はその金準備に及ぼすフランス銀行の有害な作用を無効にするために、約一週間後〔十月六日〕にまたも割引歩合を引上げ、六十日払手形は六パーセントに、それ以上の長期の手形は七パーセントとした。⁹⁾……十月六日にフランス銀行はあたらしい布告を発し、これによって同行はその種類のいかんを問はず期限六十日以上の手形は割引を拒否することとし、さらにその貸付は、公債を担保とする場合はその四〇パーセント、鉄道株の場合はその二〇パーセントを限度とし、それも期間は一カ月以内とすると声明した。しかしこれらすべての方策にもかかわらず、イングランド銀行はフランスへの金の流出を防ぐことはできなかったし、他方フランス銀行もまた、パリのパニックをやわらげることも、あるいはヨーロッパ大陸の他の諸国へ正貨が流出するのを減少させることもできなかった。

マルクスはこのように、ドイツのパニックがフランスに波及し、フランス銀行からの正貨の流出がまたイングランド銀行からの金の流出を生ぜしめてイギリスに波及したことをしるし、語をつづけてフランスの情勢についてつぎのように述べている。当時マルクスはヨーロッパの「貨幣恐慌」についてフランスの情勢を大いに注視していたと見受けられるので、ついでにここも引抄しておこう。「フランスにおけるパニックの威力は、クレディ・モビリエ株の相場が一・六八〇フラン（九月二十九日相場）〔この株の額面は前記のように五百フランであった〕から一、四六五フラン（十月六日）に下落したこと、すなわち一週間の間に二一五フランも下落したことが、証明している〔こんごクレディ・モ

ビリエ株の相場はときどき出てくるから、一つの指標として注意されたい」。しかもそのさい、非常な努力が払われたにもかかわらず、十月九日までに一五フランだけしかその相場を引上げること成功しなかったのである。……クレディ・モビリエの偉大な創立者イサック・ペレル氏が、フランス資本は特別なコスモポリタンの性格をもっているという誇大な確言をしたあとで、フランス人たちがかれらの資本のドイツへの逃避について並べた泣き言よりこっけいなものは、ほかにはありえないであろう。……かれ「ルイ・ボナバルト」は新聞が金融恐慌について論じるのを禁止し、そして両替業者に向い、自分の憲兵を通じて、銀にたいして打歩を払う「既述のように金にたいして銀が騰貴しているため」旨を書いたポスターを窓から取除ける方が時宜になつていたのであるということを仄めかした。そして最後に十月七日付のかれの『モニトゥール』紙に、かれの輩下の大蔵大臣の名でかれ自身に宛てた報告を載せ、そのなかで、万事はうまくいっていること、ただ事態にたいする公衆の評価だけが誤っていることを断定させた¹⁰。だが「不幸なことに、二日後に」発表されたフランス銀行の「月次報告」「フランス銀行は週報ばかりでなく月報も出していらしい」では、ここ一カ月間に正貨は七千万フラン弱の減少、他方割引手形は七千万フラン強の増加という状況を示した。「フランス銀行からの正貨の流出は国外へばかりではなかったらしく」現在フランス人の個人的な貴金屬「銀」蓄蔵が未曾有の額にのぼっており、「フランス銀行が正貨による支払を停止する」という噂さが日ごとに強く拡まりつつある¹⁰。

(9) 「そのあと大きな需要が生じたので、「イングランド銀行」総裁の命令によって十月一日にレートが五パーセントに引上げられた。この日はいつもの週例理事会の日ではなく、理事会のない日であった(「理事会は木曜日に開かれる慣習であったが、十月一日は水曜日であった」)。十月六日(この日も理事会日ではなく、月曜日であった)にレートは六十日手形にたいしては六パーセント、九十五日をこえない手形にたいしては七パーセントに引上げられた」——当時のイングランド銀行総裁ウエゲリンの証言(一八五七—八八年の銀行条例委員会の“Report”, Sect. 12. — Evans; op. cit. p. 61)。

(10) 一八五六年十月十六日付のエンゲルス宛の手紙のなかで、マルクスは既掲のように「最近二三週間銀の件をさらにくわしく調べた」云々といっているとともに、そこでつぎのように書いている、「ほくの見るところでは、ボナパルトは現金支払の停止 (suspension of cash payments) をほぼ避けえないであろう。そしてそうなれば、もうおしまいだ! (va la Galère)」。]

ついでマルクスは「ヨーロッパの現在の恐慌は、金(金銀?)の流出——商業恐慌の通常の前兆——が銀にたいする金の減価と絡み合っているために、一そう複雑となっている」として、金属流出というヨーロッパの——とくにフランスの——パニックの「直接の原因」の方についてつぎのように述べている。「複本位制が行われていて、支払にさいして金と銀とがある比率(それは法律で定められてはいるものの、経済的事実によって覆されうる)で受理されねばならない国は、商業上、工業上のいろいろの要因とは無関係に、この減価によって、金が本位貨であつて銀の公定相場が市場価格から離れることのないような市場(いいかえれば、銀の公定相場がない、つまり金銀の法定比価が定められていない市場)に向けて、自国の銀を輸出するように仕向けられる。イギリスとフランスとの相互関係はまさにこれである。このために、フランスの銀流通が金流通によって置きかえられないかぎり「グレシャムの法則」によって銀が流通場裡から姿を消し、もっぱら金だけが流通するようになり、これに應じてフランスが複本位制を止めない間は」、銀はフランスからイギリスへ、金はイギリスからフランスへ、当然流出しなければならない」。そしてこれにつづいてマルクスはヨーロッパの銀事情について説明したのち、この金属流出によってヨーロッパに現に存している商工業の不振が強められたとし、「もし一八五七年というものが、かつて十年前に一八四七年に伴ったような徴候にくらべてもっと悪い徴候をフランスにもたらすようなことがないならば」ルイ・ボナパルトはわが身の幸運を祝してよいとしている。

ここで見ている『トリビュン』に寄せた「ヨーロッパの貨幣恐慌」についての一連の論説のうち、つぎの十一月一日号所載の論説は既述のように利用しえないのであるが、この頃マルクスはエンゲルス宛につきのような手紙を書いている。——「商業恐慌 (kommerzielle Krisis) はいまやついにロシアの鉄道においてそのかなめの石 (Schlußstein) を与えられたように見える。『世界産業宮殿 (Weltindustriepalast)』の請負人諸君の破産は大陸諸企業へのイギリス資本家の参加を覧見させる。ドイツでは産業および銀行の株式会社企業の設定が盛んに進行している。ベルリナー・ナチオナルツァイトゥングは、これらの会社の名称を列举するだけで、非常に長い欄を用いている。『一八五六年十月三十日付の手紙』。

『トリビュン』一八五六年十一月二十二日号論説(大月選集、第九卷、二四—三二ページ。なお大月選集の「著作年表」ではこの執筆日付を十一月七日頃としている)。「ヨーロッパの金融界では情勢緩和の徴候はなに一つ認められない。われわれは……ロンドンから大陸への金の流入が今日ではいままではなくなればよいこと、割引歩合をもっと引上げようという提案がイングランド銀行の理事会でわずか一票の差で否決されたことを知っている(イングランド銀行のバンク・レートはその後十一月十三日に九十五日をこえないすべての手形にたいして七パーセントに引上げられた)。恐慌の原因をいまなおフランスに求めねばならぬことは、改めていうまでもない」。そしてマルクスはこのフランスにおける経済状況をややくわしく報じたのち、おわりにつぎのような言葉で結んでいる、——「こういうすべての事実があるからには、フランスの商工業が首尾よく倒壊を免れるということとは、ほとんどありそうもない。そしてこの崩壊は、多かれすなかれ重大な政治的諸事件を招来し、そしてヨーロッパばかりでなく、アメリカでの信用と事業関係との安定性に破局的な影響を及ぼすであろう。そしてこの深淵への猛烈な突進は、クレディ・モビリエが今日ヨーロッパの多数の支配

的銀行家たちと一緒に暮るんだロシアでの大規模な鉄道投機によって促進されずにはいないのである」と。

(11) ここでマルクスは十月末のパリ証券市場の状態を前月末と比較して、公債も、また銀行、鉄道、ガス、運輸等々いずれの部門の株式も、低落していること(クレディ・モビリエ株の相場は九月三十日一、五五二フラン、十月三十一日一、三七二フラン)とするされている)、商工業は——一般の商工業も投機的な株式会社も——争って国内の自由な資本を入手しようとしており、したがって「たとえフランス銀行〔の金融引締措置〕とかあるいは金属準備の流出とかがなかったとしても、利子率の昂騰とあらゆる工業部門での利潤の低下、そしてまたあらゆる種類の有価証券の値下り」が生じるのが当然であること、しかも建設中の鉄道路線が多数にのぼり、これらは株式や社債を新規発行するとか、それが政府によって許されないとしてもなんとかして資金を獲得しなければ破産するので、右のような圧迫はますます強くならざるをえないこと、こうした本国での企業による資本需要がますます増大しつつある一方、「外国の企業によるフランス資本の吸収」もけっしてすくなくたっておらず、フランスの資本家はスペイン、イタリー、オーストリー、ドイツで莫大な債務を負っているが、ここからくる困難があること——「戦争に参加しなかったドイツは、あとを見ずにあらゆる種類の計画に乗り出した。ドイツは自身の財源をもっていないので、わが国の財源力に頼った。……このためにフランスは国際的投機の中心地になったが、この国際的投機はフランか国民の利益を犠牲にして他の国々を富ましたのである。その結果、わが国の市場には資本が乏しくなり、そしてわが国の有価証券は購買者がますます少くなつて価格下落を蒙り」云々(前掲『トリビュン』一八五六年十月十五日号論説のなかに引用されている一八五六年九月下旬頃のパリの『コンステイティュシオン』紙の記述より)——、こうした金融市場の一般的な沈滞状態のほか、生糸の不足と価格騰貴のため工場が操業停止をしたり、棉花が高いため綿糸の価格が騰貴し他方その製品がなかなか売れないといったことが生じていること、さらに輸入穀物の激増をひきおこしている「農業危機」は、出水や悪天候という自然的災厄の結果であると同時に、これは労働力が戦争によって一時的に、また鉄道建設などの事業によって永久的に土地からひき離され、または農家の貯蓄が農業改善に投下されるかわりに投機的企業に流れ込んだことの結果、つまり「現政治体制」の結果でもあること、農民は困窮し、不満が生じていること、などについて述べ、そしてこれに加えてパリの住宅難と食糧不足、小売商業にたいする大資本の圧迫、パリの諸々の工業部門でのストライキ、警察によるひんびんとした言論圧迫、検束、といった事実があるとし、もって上掲のように「こういふすべての事実があるからには」云々と結んでいるのである。

一八五六年十一月。——右の論説が書かれたとされている日から十日ほどあと、エンゲルスはマルクス宛につきのような手紙を書いている。「今日のガーディアンにはフランスにおける破産について興味ある統計が出ている。それをきみに送ろう。／金融恐慌は若干の緩急としいに高まってゆく鋭さをもって慢性的に冬の中間中だらと続いてゆくようにしているように見える(Die Finanzkrisis scheint sich mit einigen Fluktuationen und allmählich steigender Schärfe chronisch durch den Winter hinschleppen zu wollen)」。このことは恐慌を春になっていちじるしくより悪化させる——いま急性的な爆発が生じたときにそうなる以上に——ことであろう。これまで大部分紙の上でしか成立していない会社への払込がなされればなされるほど、浮動している資本が固定されればされるほど、ますますよい。割引率が七パーセント以下にならないかぎり——そして最近の引上げは、さらにそれを引上げるをえないということを証明している——Schwindel 会社の半分についても三回ないし四回の払込が行われうる見込みはぜんぜんない。オーストリーのクレディ・モビリエ(Oesterreichische Kreditanstaltのことである)は第二回の払込さえも果してもらえないでいる。……ボナパルトが公債(Rente)を六週間このかた六六%以上に保つたために使ったであろう金額を手にとってみたいものだ。まさにこのためになされた大きな努力のゆえに、公債が六六以下になる日をぼくは転換点だと思ふのだ(三分利付公債は一八五六年九月末六七・五サンチーム、十月末六六・七サンチームであった——前掲『トリビュン』一八五六年十一月二十二日号論説による)。利子率騰貴のために下っていたのである)／この慢性的逼迫(chronische pressure)が長くつづくほど、ボナパルト一味のふしだらはますます明るみに出ざるをえず、従来詳細がわかっていなかった労働者たちの憤怒はそれだけ大きくならざるをえない。……／今度のように机の上がすっかり片づいている状態(schöne talpula rasa)を革命が二度と見出すのは容易でない。

…「フランス政府にとって」あたらしい実験や空語を弄ぶ道がなんらない。しかも他面ではいろいろな困難が完全に露呈されている。「したがって」まったく直接に雄牛の角を押えるよりほかない、そこでつぎのフランス「政府」の過渡的措施を見たいものだ、いかにかれらが齒を噛み折るかを。幸にして今度はなにものも顧慮しない勇氣さえあればなにごとかをなすことができる、というのは一八四八年のような急激なひき潮を気にする必要はもはやないだろうから」(一八五六年十一月十七日付の手紙)。フランスにおける経済恐慌の進展を直接にフランスにおける革命——これはまたヨーロッパにおける革命の烽火をなすものと考えられていた——と結びつけて考えていたことを、ここにも窺うことができる。

イングランド銀行は十一月十三日にバンク・レートを一パーセントとしたが、十二月四日には六・五パーセントに、さらに十八日には六パーセントに引下げ、このレートは翌一八五七年四月はじめまで維持された。つまり一八五六年の秋の逼迫もパニックにいたらず——エンゲルスが、直接にはフランスの事態についてではあるが、「慢性的に冬の間中だからだと続いてゆこうとしている」と見ていたように——、年末にはすこしの緩和が生じて越年し、一八五七年春となつていったわけである。この間、マルクスは十二月はじめにエンゲルス宛に「現在マンチェスターでは事業界はどうか？ 工業地帯での事業状態について若干の詳細を知らせてくれないか？」と書いているが(一八五六年十二月二日付の手紙)、これにたいするエンゲルスの返事はすくなくとも往復書簡集には収められていなく、またマルクスは越えて一八五七年一月二十三日に『トリビュン』に「金融事情」についての一文を寄せたが、前記のようによれば掲載されなかった。一八五七年のはじめは、さきに掲げておいたマルクス、エンゲルス間の往復書簡から見られるように、マルクスと『トリビュン』との関係が悪くなつていたときであつて、『トリビュン』に寄せた金融論説は

この期には右のほかなかったようであるが、往復書簡の方でも、この間の経済状態についてはこれといったことがほとんど語られていない。